

ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生の留学評価

八若 壽美子*

(2021年11月8日受理)

Evaluation of Study Abroad by a Former Exchange Student Engaging in Japanese Language Education at a University in Vietnam

Sumiko HACHIWAKA*

(Received November 8, 2021)

要旨

本稿では、ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生1名のライフストーリーを取り上げ、日本留学がどのような意義を持つのかを、日本語教師としての意識形成と日本語習得に焦点を当てて、検証した。その結果、日本留学は、日本語教師という職業に関心を持つきっかけとなったことをはじめ、日本語を教える上で不可欠な日本語能力を高め、日本や日本人について座学では得られない知識・情報を実体験から学び取るかけがえのない体験として評価されていた。日本語習得には留学ならではの实体験や人的ネットワークが大きく寄与していた。留学中の経験から得たことを教育実践に活かし、学生に伝えるという点でも留学は大きな役割を果たしていた。さらに、忙しい生活の中でも日本語能力の維持やアップデートに努め、日本語教育の研究のため再留学を計画するなど日本語学習者及び教授者として常に学び続ける姿勢が認められた。

【キーワード】日本語教師、ベトナム、元交換留学生、留学評価、ライフストーリー

1. はじめに

教育のグローバル化に伴い、留学生受入拡大のため多様な留学プログラムが実施されており、その成果について留学を終えた元留学生による検証が求められている。留学時や留学終了時に下された評価はその後の状況によって変化するため、留学経験の評価には社会人となった元留学生の視点からの検証が不可欠である。

本研究は、元留学生のライフストーリーから、元留学生が日本留学の経験をどのように捉え、留学経験がその後の人生にどのような影響を与えたかを探るとともに、日本語習得と留学評価との関連を解明しようという一連の研究¹⁾の一部である。

*茨城大学全学教育機構

一連の研究では、国内外に在住する正規課程の元留学生、非正規課程の元交換留学生のライフストーリーから、留学環境や体験は個別的であるものの、日本留学が視野の拡大や自信の獲得、専門性の深化など、肯定的に評価されていることを示してきた（池田・八若 2017、八若 2018、2019、2020、八若・小林 2021、八若・Susi 2021）。しかし、海外在住の元留学生の場合、交換留学生と学位取得を目的とする正規留学生とでは、留学評価は質的に大きく異なっていた。元交換留学生はその多くが日本語専攻で、卒業後出身国の日系企業への就職など日本語能力を活かした職業に就く場合が多く、日本語の上達は日本留学の成果の1つとしてあげられることが多かった（八若 2018、八若・小林 2021）。また、アルバイト経験などを通して得た日本の暗黙の社会規範への理解が現在の業務遂行に寄与していた。

一方、一連の研究で対象となった元大学院留学生（池田・八若 2017、八若・Susi 2021）は、帰国後大学教員として働いており、留学で得たことを自分自身の研究・教育の実践に活用し、学生に伝達している点や、指導教員や研究室内で良好な人間関係を築き、帰国後も教育・研究ネットワークを維持している点が評価されていた。日本語習得に関する評価は専門分野、留学中・留学後の日本語使用状況、日本のコミュニティとの関係などによって多様であった。

大学教員の中でも日本語教育に携わる教員の場合その専攻が日本語であることが多く、上述の元交換留学生の特徴も有していると考えられるが、日本語教師となった元留学生が日本留学をどのように捉えているかについての研究は多くない。日本語教師は日本・日本語の専門家として将来日本の良き理解者となる日本語学習者を育てる人材でもある。本稿では、一人のベトナム人日本語教師のライフストーリーから、大学教員となった日本語専攻の元留学生にとって日本留学がどのような意義を持つのかを検証する。

2. 日本語非母語話者教師に関する先行研究

海外での日本語教育においては教育機関数、教師数ともに増加し続けている（国際交流基金 2020）。国際交流基金（2020）の調査によれば、海外教育機関の日本語教師のうち日本語母語話者が占める割合は21%で、海外での日本語教育の担い手は主として日本語非母語話者教師（以下、非母語話者教師）であることがわかる。また、近年、日本の大学・大学院でも日本語教育を専攻する留学生の数が日本人学生を上回るというケースが報告されており、非母語話者教師の特性をどう活かし成長につなげるかという視点から、非母語話者教師の意識や姿勢を採る研究がなされている（嶽肩他 2012、島津 2016、川上他 2021）。

嶽肩他（2012）は、非母語話者教師の意識に関する近年の質的研究を概観し、国を問わず非母語話者教師に共通した意識として、日本語・日本文化の知識の習得や日本語学習者及び教授者として学び続ける姿勢が重要であること、学習者のロールモデルとなり知識・情報を伝えることに喜びを感じることを挙げている。また、量的・質的データを用いた同研究でも同様のビリーフや姿勢が認められたことを報告している。

川上他（2021）は、非母語話者教師の日本語教育観や経験について、中国・韓国出身の非母語話者教師3名への半構造化インタビューから検討した。その結果、非母語話者教師の利点として学習者としての経験と学習者の理解を確認・促進する母語使用が挙げられ、困難点として言葉の運用に関する説明、聴解・会話の授業、最新情報の入手、日本語の維持が挙げられた。また、「教える」ことに難しさを感じつつも、教え方の改善や工夫を試みていた。

島津（2016）は、日本語教師を目指す韓国人大学院生2名が非母語話者教師としての専門性と

アイデンティティを獲得してきた過程をライフストーリー作文から検討した。日本人とのコミュニケーションの成功時の感動といった個人的感情や言語教育の成功体験などが日本語教師という職業選択に繋がり、それらの経験によってもたらされた意識や態度が将来あるべき教師像に結びつき、非母語話者教師の役割観の形成や専門性の獲得の動因となっていることを示した。

いずれの研究の対象者の多くは日本留学経験者であり、留学経験が自らの日本語能力や日本語教育観に影響を与えていると思われるが、これらを自らの留学経験と結びつけた言及は多くはなかった。

杉村 (2019) は非母語話者教師にとっての日本留学の意義を、日本語教師としてのキャリアを開始後に日本留学を経験し、母国の大学で教鞭をとる元留学生のライフストーリーから分析している。その結果、留学が多くの学びと変容をもたらし、それらが取捨選択されながら日本語指導に活かされており、日本語教師が留学から得た恩恵は指導をうける学生にも伝承されていると指摘している。しかし、このような非母語話者教師としての意識形成や能力獲得と留学経験との関連という視点から検証した研究はまだ多くはない。

そこで、本研究では、ベトナムの大学で日本語を教える元交換留学生のライフストーリーから、日本留学の経験が日本語教師としての意識や業務にどのようなつながりを持つか、自身の日本語習得にどのように関わっているかに焦点を当て、留学の意義を探りたい。前述の国際交流基金 (2020) の調査では、ベトナムは近年日本語教育機関数・学習者数ともに大幅に増えており、顕著な日本語学習熱の高まりがみられる国の1つである。

3. 研究方法

2019年12月に、ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生1名にライフストーリー・インタビューを行った。使用言語は日本語であった。

インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示と大まかなインタビュー項目を伝え、インタビューでは必要に応じて調査者が質問を加えながら自由に話してもらった。インタビューは協力者の了解のもと録音し、文字化した。インタビューの内容の中から、留学評価と日本語教師としての意識形成、日本語習得に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。紙幅の都合で、協力者の言葉をそのまま掲載する会話形式と引用を交えた要約の形式²⁾とを併用した。また、フィラーや言い間違いは省略した。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号にした。

インタビュー協力者Aさんの留学前から現在までの略歴は以下のとおりである。

表1 Aさんの略歴

| | |
|--------|--|
| 大学入学 | 日本語学習開始。大学の交流事業で2週間日本に滞在。 |
| 大学3年次 | X大学に交換留学(約1年)。 |
| 留学終了後 | 3年次残りとして4年次課程の学修。夏休みにアルバイトで日本語を教える。 |
| 大学卒業後 | 大学の専任講師として日本語を教える。夜間の大学院(ベトナムに進学(日本文学専攻))。 |
| 大学院2年次 | Y大学大学院(日本文学専攻)に留学(1年半)。 |
| 留学終了後 | 元の大学に復職。大学院修了(修士)。日本文学の翻訳家としても活躍。現在に至る。 |

4. インタビュー協力者 A さんの語り

略歴で示したように A さんは奨学金を得て2回の日本留学を経験している。本章では、A さんの語りを、日本留学と日本語教師という仕事との関連及び日本語習得という視点から、「日本語学習及び留学のきっかけ」、各留学での「生活」「人間関係」「学修」「留学後」の項目に分けてエピソードを交えて提示した。

《日本語学習及び留学のきっかけ》

中学の時英語が大好きで高校では英語専攻のクラスに入った A さんは、大学では別の言語を学びたいと思い、いろいろな言語が選べる東洋学部に進学した。2学期目に専攻する言語を決める際に説明会で日本学科の先輩が「日本語を勉強したら、将来いろいろチャンスあります」と言っていたことや、子どもの頃から「おしん」などのドラマを見て日本の文化が大好きだったことから、日本語を選択した。

日本語の勉強は、それまで勉強してきた英語とは違っている点が多く戸惑った。文法は英語などと語順が違うので頭の中で整理できず言葉がすぐ出なかった。発音は「ズ」「ヤ」「ユ」「ヨ」などベトナム語にない音が難しかった。授業は文法や漢字の授業が多かった。日本人の先生は一人で、会話の授業は週1回だけだったので、日本語を話す機会はほとんどなかった。

大学の交流事業で約2週間日本に行った経験から日本は便利で経済的に発展している国だという印象があり、そこでの生活に憧れがあった。在学中に留学しようとは思っていなかったが、成績順で協定校に留学できる制度があったため、3年生の時先生に声をかけられ、選ばれて留学することになった。留学先にはいくつか選択肢があったが、奨学金受給などの条件から X 大学に留学することにした。

留学前に最も心配だったのは日本語だった。日本人と話す機会もなかったので、3年生になってもし全然話せず、日本人や他の留学生とコミュニケーションがとれるか心配だった。

ドラマで見た日本人の生活や文化を実際に体験し、体感できるということを最も期待していた。日本のいろいろな所を旅行したいとも思っていた。また、自分の日本語がもっと上達するという期待もあった。

A: 周りも日本人ばかりで、あと外国人の留学生と交流もできる。全部、日本語をしゃべらないといけないですね。そういう生活ですから、絶対、上達できると期待していました。

《1回目の留学について》

《留学中の生活》

ビザの問題で来日が約1か月遅れ、来日時には既に授業が始まっていた。加えて、日本語の授業は初級と上級のクラスしか開講されておらず、中級前半が終わった A さんは上級のクラスに入ることになった。最初の1か月は何もわからない状態で過ぎ、付いていくのは難しいと思って初級のクラスに移り、少しほっとした。少人数で、バングラデシュ人、ラオス人など多国籍クラスだった。

A: でも、それは良かったことかも。最初は、自分の能力、日本語能力に合ったコースがなかったことは困っていましたね。ずっと N1 持っている先輩たちと一緒に勉強をして、私、何も分からなくて、恥ずかしかったし、大変でした。

生活面でも、来日が1か月遅れたことで寂しい思いをした。

A: 生活、その時は寂しかったんですね、やっぱり。すぐ友達もできなかった。私、1か月、遅れたんですね、もうみんな、友達、できたんですね。ベトナム人いましたが、みんな、他の人

は奨学金もらえなくて、バイトをしないとイケなかったんですね。バイトをしてるベトナム人と、友達にもなりたいたんですけど、でもやっぱりみんな忙しくて、最初は、もう誰もいなかったんです。生活の面は、食事とかは問題なかったんですけど、友達がいなくて寂しかった。

留学生寮では、寮に住んでいる留学生や日本人チューターなどが集まるイベントがよく行われた。友達ができしたのは、寮で行われるパーティだった。上級のクラスで一緒だった韓国人や中国人ともよく話すようになった。大学院生の台湾人、ベトナムからの交換留学生、研究生、研究者なども仲良くなった。友達がだんだんできて、寂しさも乗り越えられた。

X大学では、日本語コース履修者のための研修旅行が各学期に1回、全学留学生対象の見学旅行が年1回、その他に地域の国際交流団体の招待による旅行などもあり、これらに参加することによって交友を拡大、深化できた。

夏休みや春休みは長かったので、よく一人で旅行した。旅行での印象深いエピソードがある。

A: ひまわり祭りがあって、ひまわりが大好きなので、そのひまわり祭り、見に行ったんですね。だけど、すごい田舎の所ですから、交通は不便ですね。歩かないとイケなかった記憶があります。その時は、道に迷ってたんですね、ひまわり畑まで行けなくて。ラーメンの店で、食べた後で道、聞きました。道を聞いたら、説明してくれたんですけど、なかなか分からなくて。そのラーメン店のオーナーさんは、車に乗せてくれたんです。ひまわり畑まで連れてきてくれたんです。すごい感動しました。

また、京都に行った時にも忘れられない思い出がある。

A: 京都でバスに乗ったとき、どこで降りるか分からなくて、周りの人に聞いてみたんですね。1人の若い女の人が助けてくれました。「私も一緒に降りますから」、一緒に降りて、その後は、いろいろ連れて案内してくれたんです。京都に詳しい人ですから、いろいろ案内してくれて。

日本ではいろいろな人が助けてくれた。全然知らない人でも優しく教えてくれた。

また、留学中、日本語教師という現在の職業に関心を持つきっかけとなった体験があった。

*:³⁾ 日本にいる間に日本語が上達したなど思うようなことは、やっぱりありましたか。

A: ありましたね。日本人と交流できたこと、大勢の前で発表できること。特に、X大学の先生と一緒に参加したボランティアの活動ですね。近くの町でインドネシア人に日本語を教える活動に参加して、そのおかげで、あと日本語教師に興味を持つようになりました。

*: そう言われると、すごいです。

A: そのおかげで、多分、私の今の仕事は、そのボランティアの活動からスタートだと思います。

*: 初めて教えたんですね。

A: はい、そうですね。

*: 日本人よりやっぱりうまく教えられる。

A: 先生、褒めてくれたんですね。その時、すごいうれしかった。その前は、教師の仕事、嫌いでしたよ。毎日、同じことをやって、なんかつまらないと思って。だけど、誘われたとき、あ、なんか自分にも役に立つかなと考えて、参加してみました。その時、全然しゃべれない人たちに、自分は日本語、簡単な日本語で声、掛けて、だんだん少しずつ会話ができるようになってうれしかった。この仕事も楽しいんじゃないかと考え始めました。

《留学生としての学修》

上述のように、1か月来日が遅れたこと、レベルに合った日本語クラスがなく上級クラスに入ったことなどで、来日当初は苦労した。1か月後初級のクラスに移り、楽になった。

日本語のクラス以外には、1学期目から指導教員の授業とゼミに参加した。異文化理解の授業だったが、最初は何もわからず大変だった。指導教員の授業以外にも、異文化理解関連の授業や英語の授業を取った。

2学期目は、友達もでき、授業にも慣れて、日本語の上達も実感できるようになった。

A: その後は慣れてきましたね。特に、日本語の授業で友達もできて、先生とも会話できました。自分の日本語能力もだんだん上がってきて。

ゼミでも多くの人の前で一人で発表できるようになり、自信がついた。

A: ちゃんと自分の話も、相手、理解してくれて、それは良かったかなと思いました。

*: 相手が理解してくれるというのはいいですね。

A: はい。例えば、異文化の授業で、ベトナムの文化を紹介したこととか、ベトナムの伝説の話とか、みんなの前でそういう話をして、みんな、理解してくれて、良かったです。だんだん、自信、付いてきて。

《留学中の人間関係》

1か月来日が遅れたことで、既にできた友人関係の中に入れず、最初は寂しい思いをしたが、留学生寮で行われるイベントなどを通して、徐々に様々な国からの留学生と友達になることができた。

指導教員は優しく、よく指導してくれた。いろいろな所へ連れて行ってくれたり、指導教員の家でパーティにもよく呼んでくれたりして、関係はとてもよかった。また、当時ベトナムとの関わりがあった先生がいろいろ助けてくれた。その先生の授業は取っていなかったが、映画を見てディスカッションをするイベントや課外活動に誘ってくれた。留学後先生方がベトナムに調査に来た際には会うなど、今でも連絡を取り合っている。

前述のように、多くの留学生の友人を得、留学後も連絡を取り合う関係が続いている。ラオスに研修で行った時には元クラスメートが空港まで会いに来てくれた。韓国人の友人が二年前ベトナムに来た時一緒にハロンを観光した。昨年Aさんが韓国に行った際にも会う機会を得た。

一方、日本人の友人もできたが、親しいと思える関係にはなれなかった。

A: 悪い面ではないんですけど、日本人の友達もできたんですけど、そんなに親しくなかったんですね。日本人って、私も異文化の授業を受けて、日本人とベトナム人の違いも勉強して、例えば、日本人は本音と建前があって、あんまり本音、出さないとか。いつも建前、いいことばかり言って、本当にどう考えてるか分からなくて。だから、親しい日本人の友達、できてないんですね。

チューターは日本語の作文やレポートのチェックなどをしてくれて感謝しているが、会うのは1か月に1回程度で仲がいいという関係にはならなかった。積極的ではない自分にも問題があったと思うが、日本人学生とはコミュニケーションはとっていても留学生の友人と同じような関係になるのは難しかった。

*: それは割とよく聞きます。だから、距離の取り方、向こうも苦労しているっていうこと、ある

かもしれないですね。

A: そうですね。日本語、その時も、そんなにたくさん話せなかったから、チューターに会った時も、たくさん話せなかったです。それで、限界があるかな。その会話のテーマとか、あまり広がらなくて。

地域住民との交流にも積極的に参加した。大学の行事としてのホームステイのほか、ベトナムに関心がある家庭から招待されたり、クラスメートのホストファミリーの家と一緒に行ってホームステイしたりした。帰国後ベトナムに遊びに来た人もいるが、SNSを使わない年配の人たちとはその後連絡がとれなくなったのを残念に思っている。

大学の近くに住んでいる老夫婦にも親切にしてもらった。料理を一緒に作ったり、着付けや生け花を教してもらったりして、「本当に日本人の生活、日本人の家庭の生活」が実感できた。一番の思い出は夏祭りに地域の人に踊りを教えてもらって、一緒に踊ったことだ。

多様な人々と関わりを持ち、多くの優しい人々に支えられた留學生活だった。X大学への留學は「私の中、その1年間は最高でした」と言える。

《1回目の留學終了後》

当時は単位互換の制度がなかったため、出身大学で3年生の課程の残りとして4年生の課程を終えなければならなかった。卒論のテーマは村上春樹だった。

A: ボランティアの活動に参加して、ここに帰ってからも、日本語教師の仕事をやってみたいなど思って、3年生、終わった後で、夏休みですから、アルバイトを始めました。普通、ベトナム人は、アルバイト、あまりしてなかったんですね、その時は。私も全然してなかったんですけど、でも、やっぱり日本でもいろいろな経験があったから、バイトを始めようと思ってたんですね。で、日本語教師、その時は、技能実習生に教えました。『みんなの日本語』の教科書で日本語を教えましたね。日本語を教えたおかげで、自分の日本語能力、上がって、卒業した後でも、やはり日本語教師、続けたいなどと思って、今の大学のセンターに応募しました。

大学卒業後日本語教師として働きながら、夜間の大学院で村上春樹の研究を続けた。1年後在籍大学とY大学とが協定を結んだのを機に、奨学金を得て1年半Y大学の大学院に留學することになった。Y大学では専門の日本文学を学び、引き続き村上春樹の研究をした。

《2回目の留學について》

《留學中の生活》

2回目の留學では、会話もでき、買い物や旅行なども一人で対応できたので、生活面ではほとんど困ることはなかった。Y大学大学院ではX大学の時のような留學生サポートはなく、来日初日から全部自分で対処しなければならなかった。

A: Y大学に行った初日、誰も迎えに来てくれなかったんですね。駅で大きい荷物、自分で運ばないといけないですね。スーツケース、二つ、すごい大きかったんですね。

*: 1年半ですからね。

A: そうですね。最初は、寮、1週間泊めてくれたんですね。他にアパートを探す間に。それで、寮まで自分で行ったんですね。だけど、途中で、荷物、多かったから、タクシーに乗ることしか。だから、タクシー、乗りました。

歩いて行ける距離だったが、一人で荷物を運ぶのは大変でタクシーに乗ることになった。

最初の留学とはいろいろな面で大きく違った。チューター制度もなかった。

A: X大学にいた時、センターがあって、そのセンターの人たちがいろいろ、市役所とか携帯、買いに連れて行ったんですけど。指導教官が直接空港まで迎えに来てくれなかったけど、代わりに誰か迎えに来てくれたんですね。それはすごい優しかった、親切でしたね。だけど、Y大学にいた時、もう全然何もなかった。全部、自分でやらないといけないことになりましたね。市役所とか、携帯電話とか、銀行口座を開くとか。

全部自分で対応したので、自立できたと思う。「どこに行っても一人で生活できる」自信がついた。

Y大学は東京まで電車で約20分のところにあり、X大学のある町と違って物価が高かった。アパート暮らしは家賃も高く、寮と違って、友達と一緒に過ごす時間は持てなかった。研究室とアパートを往復する毎日だった。

A: そうですね。X大学にいたときは、交流会とかたくさんあって、いろいろな友達ができました。いろいろな国からの友達、できました。だけど、Y大学にいたときは、ほとんどそんなことはできなかつたんですね。

《留学生としての学修》

Y大学の指導教員は村上春樹の研究をしていたので、村上春樹の研究が中心となった。夏目漱石や芥川龍之介に関する授業や、ライトノベルの研究をしている先生の授業など指導教員以外の先生の授業も受けた。指導教員からベトナムに興味があるという先生を紹介され、本や雑誌の編集に関するゼミにも参加した。

指導教員の研究対象は村上春樹だったが、ゼミの学生の研究テーマは古典も含んでおり、学生の発表を理解するのは難しかった。また、指導教員の学部の授業も受けたが、学生が選んだ作品について発表する形態で理解するのは大変だった。

A: 先生の授業で、学部の授業ですけど、その授業も受けてましたね。1人は1冊の本を選んで、まとめて、他の人の前で発表するみたいな感じの授業ですけど、その授業も分からなかったですね。本を読まないと、よく分からないですね。

しかし、Y大学での授業はベトナムにはない授業なので、いい経験だったと思う。

A: でも、いい経験ですね。研究の仕方とか、本の読み方とか、読書の授業あるから、その授業、みんな一緒に本を読んで、その段落について、その人物について解釈するから。ベトナムで、そういうことはなかなか。

この経験から学生にとってもいい勉強になると思い、読書の授業を作ろうと思っている。

A: 私、読解の授業、担当してないんですけど、センターの図書室で学生、よくそこで勉強してて、自習室みたいな感じですね、自習してる学生に読書とか先生が紹介して、この本がいいよとか、学生に紹介して、一緒に読書の勉強とか、つくりたいなと思っています。

《留学中の人間関係》

アパート暮らしではX大学への留学の時のように留学生の友人はできなかったが、多くの時間を共にする研究室で日本人の友人を得た。

- A: 同じ指導教官、2人の日本人、友達ことができましたね。中国人の友達もできました。今回は、X大学にいた時と違うところは、日本人の友達、ちゃんとできました。その2人も、教室もいつも一緒に入って、研究室も同じ。
- *: いる時間、長いですね。
- A: そう、いる時間、長くて、いつも一緒ですから。あと、そのゼミ、私だけベトナム人ですから、外国人ですから、いろいろ助けてくれたんです。
- *: 論文を書くときとかも。
- A: いつもチェックしてくれて。
- *: 興味も似てるから、話すことができますね。
- A: そうですね、話すことは結構ありますね。あと飲み会とか、よく参加してて。それは、本当に友達できました。で、1人は、そのY大学を卒業した後で、日本語教師の仕事も始めました。それで、ホーチミンでやりました。

その友人は今は日本語教師をやめ、ホーチミンの別の会社で働いていて、ベトナム語もできるようになっている。出張でハノイに来た時には会っている。

上述のように、研究中心の生活で、地域の人や他の留学生との交流はほとんどなかった。

- A: ちょっと寂しいですね、ある意味で。私と同じ大学を卒業した人と、時々、新年会とか忘年会があって集まるけど、他にはないんですね。時々、一緒に出かけてみたいいな感じですね。

《東日本大震災》

2回目の留学中に東日本大震災があった。

- A: その時は、多くの留学生は帰国しました。心配なので、他の人は帰国したんですけど、私は。地震があったのは2011年3月ですね。帰るか、ちょっと迷ってたんですけど、国際交流センターの人から、帰ったほうがいいよって言われましたが、でも、やっぱり帰った後でもいろいろ大変かなと思って残りました、帰らずに。
- *: 東京だったら、その後、そんなに残ってもね（大丈夫）。
- A: だけど、その地震があった時、いろいろ、日本人の精神が分かるようになりましたね。強かったことですね。
- *: 強いと思ったんですか。
- A: はい、強いと思いました。
- *: 例えば、どんなところでですか。
- A: 地震があった日、家に帰れない人、いましたね。その中で、みんな、ちゃんと並ぶこと、それはすごい印象に残ってました。
- *: パニックにならないで。
- A: パニックにならないで。もうベトナム人だったら、すごい怖くて。あと、取り合いになったり。
- *: 取り合ったり、残ってるものを。
- A: そうですね。ていうこともあります。でも、日本人はきちんとしていた。それはすごいなと思って。それは「さすが日本人ですね」と思いました。みんな、結構冷静ですね。
- *: そうでしたね、なんか。
- A: 周りの外国人、私の友達も、ある人は、もう内定もらったんですね。だけど、怖くて、もう帰国しちゃったんですね。そういう人もいました。日本人の友達と話してみたら、日本人だから

逃げる所ない、残るしかない、日本にいるしかないから。それはそうですけど、でも、日本人は強いなと思って、精神的に。だから、いろいろ学べました。本当にその日自分の中も怖くて、いろいろな人にも言われたんですけど。でも、日本人を見て、「ああ、やっぱりいろいろ学べる」と思いました。

地震はすごく怖かったが、このような日本人の姿勢に触れ、「自分も何か役に立ちたいな」と思い、ボランティア活動に参加した。被害の大きかった陸前高田に行った。

A: 結構、地震の被害、ひどかった所ですね。5階建ての小学校かな、全部、壊れてた。ひどかったんです。自分の目で見て、すごい怖かった、こんなひどい地震があったなと思って。

*: でも、すごい、ボランティアに参加してくれたんだ。

A: いえ、でも、本当に行ってみたら、逆に、なんか力をもらいました。あんな被害、受けたんですけど、みんないつも優しく迎えてくれて、いろいろなものも、食べ物とか作ってくれて、すごい感動してましたね。私たち、何もできなかったんです。

*: いやいや、そんなことないです。

A: 本当に本当に。その村、おじいさん、おばあちゃんばかり。若い人、あんまりいなくて。だけど、いつも笑って迎えてくれたから、心、暖かかったなと思いました。

*: 何日後ぐらいに行ったんですか。

A: 2日。でも、夜行バスですからね。

*: 地震の2日後ぐらいに？

A: そうですね。テントの中に入って泊まりました。ちゃんと屋根があったんですけど。

*: 寒かったでしょう。

A: 寒かったんですね。雪とかが降ってた日。すごい寒かった。でも、そのボランティアの活動に参加して、村の人から力をもらって、それは私の中の忘れられない思い出です。

*: それは、本当に、地震、ないとできないというか。

A: でも、実際に行って、今までドラマとか本とか日本人についてたくさん書いてるんですけど、でも自分の目で見て。

*: 『おしん』の世界だったんですね、精神が。

A: そうですね。日本人の精神を本当に分かるようになりました。実感できました。(中略)

A: でも、多分、これから困難があっても、その精神を維持したら、どんな困難でも乗り越えられると思います。

《2回目の留学終了後》

2回目の留学に際して仕事を辞めなければならなかった。Aさんの後任は1年契約だったため、留学中に元の勤務先のセンターの講師から「戻りたいか」との打診があった。戻る意思があるなら新しい講師を採用せずに待つとのことだったので「戻りたい」と回答し、留学終了後もとの常勤講師のポストに戻ることができ、現在も同センターで日本語を教えている。授業以外にも事務、外部との連絡、他大学とのやりとり、会議の通訳などの仕事もあり、忙しい。

日本語教師のほか、日本の小説の翻訳をしている。主にライトノベルの翻訳で、これまで5冊翻訳した。人気作家の作品や映画化された作品もある。出版社から頼まれたものを翻訳するが、好きではない作品なら断ることもある。1年に1冊くらいのペースで翻訳している。フルタイムの常勤講師なので、翻訳にあてる時間は夜か週末しかない。小説の翻訳は集中しないとできないし、行間

を読まなければならないので大変だ。適切なベトナム語を選ぶのも難しい。

A: ベトナム語、一番、難しいですよ。

*: どの言葉を選ぶか。

A: そう、どの言葉を選ぶか。文学的な言葉ですから、もうそれは大変。あと、生活にもあまり良くないんですね、夜中まで仕事やって。

今は少し休みたいと思っていて、頼まれたら資料など、軽いものを翻訳している。

*: じゃあ、本当に、日本語と切っても切れない生活をしてるっていう感じですよ。

A: はい。今、生活は7割か8割、日本語ですね。このセンターで仕事してるのも、うちに帰っても。うちにいる時間、あまりないんですね。だから、ほとんど日本語を使って生活してます。

毎年1回くらい日本語教育に関する研修やシンポジウムに参加するために日本に行くが、専門的な言葉は難しく、理解できないことも多い。言語は生活の変化に伴って変わるので、新しい言葉も出てくる。日本語能力の向上にも努めたいと思っている。

A: アップデートしないといけませんね。最近は全然時間なくて。だけど、できれば毎日日本語でニュース見たいですね。前はやってたんです。だけど、今年は忙しくてチェックするものが多かったから、ほとんど時間を取れなかったんですね。でも、できれば、毎日日本語のニュースもやりたいですね。

通勤のバスの中でも日本語の本を読んだりして日本語能力の維持・向上に努めている。また、日本語教育については研究の経験がなくその必要性を感じるので、奨学金が得られれば再留学して日本語教育に関する研究がしたいと思っている。

《留学を振り返って》

2回の留学はいずれもかけがえのない経験だった。

A: 留学の経験もすごく役に立ってるし、日本語の勉強も。日本語教師、選んだ理由も、日本語を使えるからっていう理由があって、毎日日本語を使えるっていう仕事をしたいですね。例えば、私の同じ学部、卒業した人は日系企業ですけど、毎日、日本語を使わないんですね。例えば、人事部の人たちですね。いろいろな仕事の種類があって、全然日本語を使わない人もいますね。でも、やっぱり日本語を長く勉強して、日本語を使いたい、日本語を使える仕事をしたいですね。

留学経験は仕事をする上で役に立っている。

A: 1回目と2回目。1回目は、まず、さっきも述べたとおり、日本語が上達できたと自分は感じました。1人で大勢の人の前で発表できることとか、自分で旅行できることとかあと、地域の人と交流できることとか。やっぱりそのことから、日本語だけじゃないって、日本についての知識もちゃんと身に付いて、今の仕事に役に立ってると思います。日本語を教えることですけど、日本語だけじゃなくて、日本人の性格とか、日本人の特徴とか、あと日本の文化とかも教えることはできると思いますね。

*: もう、セットですからね。

A: はい、そうですね。だから、例えば、今は日本事情の授業と日本史込みの授業を担当していま

すね。ですから、日本語だけじゃなくて、日本についての知識も教えられると思いますね。それは、日本への留学経験から。それはすごく効果的にやっていると思います。2回目の留学は研究、仕方とか、読書とか、その経験からは今の翻訳の仕事もすごく役に立つと思いますね。

2回の留学機会を得たが、やりたくてもできないこともあった。

A: X大学にいたとき、受け身じゃなくて、もう少し自分から積極的にやれば、もっと良かったなと思いましたね。今、振り返ったら、ああ、ちょっと後悔しているなと思いました。その時、みんな優しい。優しいから、自分は受け身になってしまうんですね。自分から助けを求めてるっていう感じですね。もちろん、その時、大変なことあったから、それで、ちょっとまだ積極的じゃなかった。だから、もっと積極的に人に声、掛けて、コミュニケーションを取れば良かったなと思いました。

今教えている学生はですね、卒業した後で、日本のZ大学に留学するという最終目標ですね。それは、ちゃんと目標があって勉強してるっていうことですね。だけど、私は、その時は目標ははっきりしてなかった。それは今後悔してる。ちゃんと目標があったら、もっと良かったなと思いました。何となく留学、決まって、選ばれて、ああ、行けるって喜んだんですけど、でも、自分の中はちゃんと、留学している間、何ができるか、どのぐらい成長できるかという計画も何も立ててなくて。いろいろな人が助けてくれたから日本語も上達できたけど、でも、ちゃんと目標があったら、その留学の意義がもっとあったかなと思いましたね。

*: それは後から言えるけど。まだ年齢も低いから。

A: そうですね、その時は若かったね。あまり考えてなかったんですね。実際、今の学生たちを見て、あまり目標を持ってないんですよ。だけど、自分の失敗したこと、その目標を持ってないから、あまりそんなに成長できないよっていうことは、学生に伝えたいと思いました。

5. 考察

Aさんは2回の留学を経験しているが、1回目と2回目の留学生活やその評価は、自身の日本語能力や意識などの個人要因、受入体制などの環境要因によって大きく異なっている。本章では、2回の留学の意義を、日本語習得と、日本語教師という職業に対する意識、学び続ける姿勢に焦点を当てて、考察を加える。

《日本語習得と人的ネットワークについて》

高校では英語専攻のクラスを選んだAさんは、大学では別の言語を学びたいと思い、日本のドラマなどによる親近感や先輩の助言から日本語を学ぶことにした。成績が良かったAさんは3年生の時、先生の勧めがきっかけで交換留学することになった。留学できること自体が楽しみで日本で生活すれば日本語が上達するという期待があったが、明確な目標があるわけではなかった。

大学で3年近く日本語を勉強したが、話す経験は少なくて自信がなかったため、来日当初は授業や友人作りに苦労した。日本語は留学生同士を結ぶ言語として機能し、まず留学生コミュニティへの参加により日本語の上達を実感し、続いて留学生や国際交流に関心を持つ地域住民へと人的ネットワークを広げた。授業や交流の場で自身が話したことが理解されることに喜びを覚え、自信となった。1回目の留学では授業などで接触はあるものの日本人学生の親しい友人は得られなかったが、2回目の留学では同じ関心を持ち、多くの時間を共にする研究室の日本人学生と良好な関係を築いている。

八若・小林（2021）は、留学中の人的交流と日本語習得との関係について、「他者との関わりやその評価によって自らの日本語の上達を確認し、日本語の上達が他者との関わりを促進するという経験を繰り返して人的交流が拡大・深化していく循環的過程」が見られ、留学後も継続していると指摘している。Aさんの場合も同様の循環的過程にあたると考えられる。

また、留学中に起こった偶発的困難の克服や一人旅などの経験が日本語使用の自信につながった。このように、Aさんの日本語習得には留学ならではの実体験や人的ネットワークが大きく寄与していると言えるだろう。

《日本語教師としての仕事》

1回目の留学中にボランティアで日本語を教えた経験が日本語教師に関心を持つきっかけとなった。誘われて参加したボランティアだったが、全く話せなかった人たちが簡単な日本語で会話できるようになったことに喜びを覚えた。また、一緒にボランティアに行った先生から教え方を褒められたのも嬉しかった。島津（2016）の調査対象者と同様に、言語を教えた成功体験が「日本語教師」という職業選択に繋がっている。帰国後の夏休みに技能実習生に日本語を教えるアルバイトを始め、大学卒業後夜間の大学院に通いながら大学での日本語教育のキャリアを開始した。

Aさんは、日本語教師としての仕事では、日本語だけではなく、日本人の特徴、日本文化など日本に関わる知識も教える必要性があり、その意味で地域住民との交流や旅行など留学中の体験が有益だったと語っている。例えば、旅行では訪れた町や名所について知るだけでなく、旅先で困った時に親切にしてくれた人々から日本人の性質を感じとったエピソードが語られている。東日本大震災は留学中の特筆すべき出来事だった。東京近郊で自分自身も大変な思いをしたが、パニックにならず整然と並んで歩く帰宅困難者の姿に「日本人の強さ」を感じたという。ボランティアとして行った被災地では優しく迎えてくれた被災者の姿に逆に力もらった。逆境の中で「日本人の精神」の本質を実感した体験であった。これらは、授業やメディアなどからの知識ではなく、自らの実体験を通してでしか感じ取れないものもあり、留学したからこそ得られたものだと言えるだろう。

また、先行研究（池田・八若2017、川上他2021、杉村2019、嶽肩他2012、八若・Susi2021）の日本語教師や大学教員と同様に、留学で得たことを自らの教育実践にも活かしたり、学生に伝えたりしている。一つの作品を皆で解釈しながら読む授業の経験をもとに、勤務校でも読書の授業を取り入れることを計画している。卒業後日本留学を目指す学生には、自らの経験を踏まえて、留学に際して「目標を明確にすること」、「積極的にコミュニケーションをとること」の重要性などを伝えている。

《学び続ける姿勢》

Aさんは「日本語が使える仕事をしたい」という希望から、現在、大学での日本語教育と翻訳という二つの仕事に従事している。生活の7～8割は日本語だというが、海外で教える非母語話者教師の困難点とされる日本語能力の維持とアップデートを心掛けている。最近は忙しくてできない場合もあるが、毎日日本語のニュースをチェックしたり、通勤バスで読書をしたりしている。年に1回程度日本のシンポジウムに出席したりするが、専門用語などわからないことが多いことにも気づかされる。日本語を教えて数年が経過し研究会などには参加しているが、日本語教育に関する研究の経験がないのは専門性という点では弱点だと思う。機会が得られれば、日本語教育の研究のために再度留学したいと考えている。

以上のように、Aさんの語りから、非母語話者教師の共通意識として先行研究で指摘された、日本語・日本文化の知識の習得の重要性、日本語学習者及び教授者として学び続ける姿勢の重要性、自分が得た知識・情報を伝えることの喜びなどが認められた。Aさんにとって日本留学は日本語教師に関心を持つきっかけを得たことをはじめ、日本語教師としての意識の形成や専門性の獲得に欠かせない経験であると評価されていた。

特に、1回目の留学では、日本語専攻の元交換留学生としては、八若(2018)、八若・小林(2021)の日系企業で働く元留学生と同様に、「日本語の上達」と「日本の社会・文化への理解」を留学の成果として高く評価していた。2回目の留学では、文学作品の鑑賞法や研究方法など学んだことを教育実践に活かすほか、翻訳の仕事に役立つ経験として評価していた。日本語教師としての専門性については研究実績がない点を弱点として評価し、日本語教育研究のための再留学を模索していた。八若・Susi(2021)の大学教員とは異なり、専門分野である日本語教育における日本の人的ネットワークへの言及はなかった。

6. おわりに

本稿では、ベトナムの大学で日本語教育に携わる元交換留学生Aさんのライフストーリーを取り上げ、日本語教師となった元交換留学生にとって、日本留学がどのような意義を持つのかを日本語教師としての意識形成と日本語習得に焦点を当てて、検証した。

その結果、日本留学は、日本語教師という職業に関心を持つきっかけを得た場であることをはじめ、日本語を教える上で不可欠な日本語能力を高め、日本や日本人について座学では得られない知識・情報を実体験から学び取るかけがえのない体験として評価されていた。留学中他者との関わりから日本語の上達を確認し、日本語の上達が他者との関わりを促進するという経験を繰り返して人的交流が拡大・深化していく循環的過程が見られ、日本語習得には留学ならではの实体験や人的ネットワークが大きく寄与していることが判明した。留学中の経験から得たことを教育実践に活かし、学生に伝えるという点でも留学は大きな役割を果たしていた。さらに、忙しい生活の中でも日本語能力の維持やアップデートに努め、日本語教育の研究のため再留学を計画するなど日本語学習者及び教授者として常に学び続ける姿勢が認められた。

前述したように海外の日本語教育の主たる担い手である非母語話者教師の果たす役割は大きい。本研究では、Aさんのライフストーリーを通して海外で教える非母語話者教師にとって、留学体験が日本語習得、教師としての専門性獲得や意識形成の根幹となる体験であることを明らかにした。しかし、本研究の協力者は1名だけで、2度の留学経験を持つ恵まれたケースであったと言える。日本語教師を目指す留学生にとってさらに有意義な留学とするためにどのようなことが必要なのか、引き続き個々の元留学生の経験を丹念に聞き取っていく予定である。

付記

本研究の調査は2019年度茨城大学サバティカル制度の支援を得て行った。

注

- 1) 本研究は科研費(17K02839)による研究成果の一部である。
- 2) 要約した部分の「」は協力者の言葉を引用したものである。
- 3) 「*」は調査者の発言。

引用文献

- 池田庸子・八若壽美子（2017）「元留学生のライフストーリーに見る留学評価－出身国の大学教員の場合－」茨城大学留学生センター紀要 15, 13-28.
- 川上尚恵・齊藤美穂・朴秀娟・高梨信乃（2021）「海外の大学で教える非母語話者日本語教師が必要とするもの：非母語話者の特性を考慮した日本語教師養成プログラムの構築に向けて」神戸大学留学生教育研究 5, 1-21.
- 島津百代（2016）「日本語「ノンネイティブ」教師の専門性とアイデンティティに関する一考察」関西大学外国語学部紀要 14, 33-46.
- 国際交流基金（2020）『海外の日本語教育の現状 2018 年度 日本語教育機関調査より』国際交流基金
- 杉村佳彦（2019）「外国人日本語教師のライフストーリー、日本への留学経験がもたらす恩恵を語る」九州地区大学教育研究協議会発表論文集 68, 207-214.
- 嶽肩志江・坪根由香里・小澤伊久美・八田直美（2012）「PAC 分析と質問紙調査併用によるピリーフ研究：あるタイ人日本語教師の事例より」横浜国立大学留学生センター教育研究論集 20, 93-114.
- 八若壽美子（2018）「インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 1, 29-45.
- 八若壽美子（2019）「元留学生のライフストーリーに見る留学評価－家族と日本で生活する元留学生の場合－」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 2, 29-46.
- 八若壽美子（2020）「再来日した元交換留学生のライフストーリー－支援される側から支援する側へ－」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 3, 29-43.
- 八若壽美子・小林英弘（2021）「タイの日系企業で働く元交換留学生の留学評価－翻訳・通訳業務従事者の場合－」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 4, 119-136.
- 八若壽美子・Susi Widianti（2021）「元留学生の日本留学評価－インドネシアの大学教員の場合－」茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究 4, 137-153.